



さい帯血バンク NOW

2014年3月15日発行

日本さい帯血バンクネットワーク

発行者：加藤俊一（会長）

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社ビル内

TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417

<http://www.jc-cord.gr.jp/>

最終号
(第74号)

日本さい帯血バンクネットワークは解散へ 業務の多くは日本赤十字社が引き継ぎ

日本さい帯血バンクネットワークは1999年8月に設立されて以来、15年間にわたって各地で事業を行っているさい帯血バンクの持つさい帯血情報を一括で管理公開し、移植に用いるさい帯血の提供に尽力してきました。2012年9月「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」が成立し、本年1月1日に施行されました。これにともない、日本さい帯血バンクネットワークはその役割を終え、正式には3月17日に開催する総会で決定しますが、本年3月末をもって解散することになります。また、各さい帯血バンクは国への申請を行い認可された後、臍帯血供給事業者として責任を負い、事業を運営することとなります。さい帯血バンクの利用者のみなさまには、従来と同様のシステムでさい帯血の提供が行われますが、これまで日本さい帯血バンクネットワークが担ってきた業務の多くは支援機関としての日本赤十字社が行うこととなります。今後とも、さい帯血バンク事業へのご協力とご支援をお願いいたし

ます。

■日本赤十字社からのメッセージ

日本赤十字社は法に基づき、国から造血幹細胞提供支援機関として指定を受け、支援機関業務を行うこととなりました。支援機関業務には四つの業務があり、その中でこれまでネットワークが行ってきた業務の一部を引き継ぐこととなりました。

法の第45条で規定される支援機関の第1号業務である骨髄・末梢血幹細胞ドナー登録その他の造血幹細胞提供関係事業者に対する協力として、各種委員会の設置や臍帯血の品質向上にかかる研修会の開催を想定しています。

第2号業務である造血幹細胞提供関係事業者間の連絡調整として、臍帯血供給事業者間の各種連絡会議の開催等を行います。

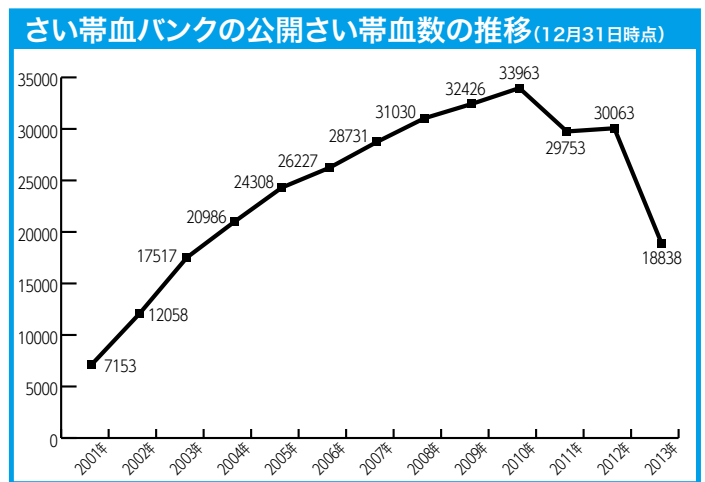
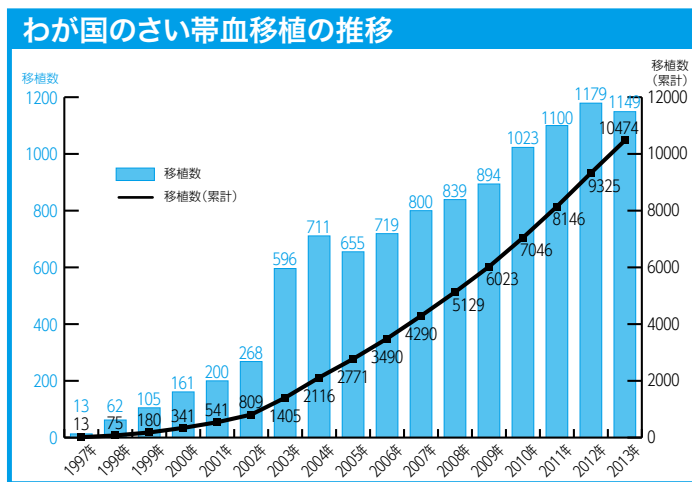
第3号業務である移植に用いる造血幹細胞に関する情報の一元的な管理・提供として、造血幹細胞移植に関する情報の提供を想定したポータルサイトを開設することにより造血幹細胞移植が必要な患者や移植医

療施設の利便性の向上を図ります。また、公開検索システムの運用に関する各種契約の承継及び日本造血細胞移植学会により認定されたさい帯血移植医療施設のシステム登録も継続します。

第4号業務の移植に用いる造血幹細胞の提供に関する普及啓発として、従来使われてきた印刷物の作成を引き継ぐこととなっております。

以上の業務以外にも各さい帯血バンクからの支援機関への要望に基づき必要に応じて会議を開催し、業務に反映することとしております。法令に基づき、造血幹細胞移植が円滑かつ適正に実施され、移植を必要とする方々により良い移植の機会が十分に確保されるよう努める所存です。今後、日本赤十字社は関係者の皆さまとより一層の連携を図り、新たな使命感のもとに移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に寄与し、支援機関業務に取り組んで参りますのでご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

グラフで見るさい帯血バンクの実績



「わが国のさい帯血移植数の推移」では、順調に症例数が伸びてきたことがわかります。一方「公開さい帯血数の推移」では2011年と2013年は大きく減少しています。この原因は、2011年には複数のさい帯血バンクで、調製施設の定められた期間ごとの清浄度試験を逸脱した事例が明らかとなり、当該期間に調製されたさい帯血の公開を取り消したため、2013年は東海大バンクのHLA検査のとり違い、兵庫バンクのバッグ破損事例により公開を取り消したためによるものです。



東京臍帯血バンクも事業終了に

沖縄で開催された第36回日本造血細胞移植学会総会で、恒例となっている「骨髄バンク・さい帯血バンク合同報告会」が3月8日にありましたが、この中で、厚生労働省移植医療対策推進室の泉潤一室長は、新法の施行にともない各さい帯血バンクは許可制となりましたが、既に事業終了の意志を表明

していた東海大学さい帯血バンクとともに、東京臍帯血バンク（小松博久理事長）も今年度で事業を終了することを明らかにしました。なお、東京臍帯血バンクがこれまでに保存公開しているさい帯血の今後の取り扱いについては日本赤十字社との協議が行われることになるようです。

かつては11のさい帯血バンクによって行われてきたわが国のさい帯血バンク事業は4月以降は、日本赤十字社の4つのバンク（北海道・関東甲信越・近畿・九州）と、中部さい帯血バンク、兵庫さい帯血バンクの6バンク体制で運営されることとなります。

バッグ破損調査報告を受け 兵庫さい帯血バンクが公開と出庫を再開

兵庫さい帯血バンクで昨年明らかになったさい帯血保存バッグの破損事例について、同バンクでは外部有識者による調査委員会が原因究明と対応策の検討をしていましたが、その報告が今年1月にまとめられました。報告書によると、バッグが破損した原因として、使用していた凍結保護剤は気泡が生じやすく、さらに同バンクが採用してい

たバッグのシーリング（加熱圧着）方法では、圧着不足や使用材料の劣化等が重なった場合に極小の穴ができて、液体窒素で保管中に液体窒素がバッグ内に侵入することにより、解凍した際に液体窒素が急激に気化膨張し破損した可能性が高いと報告されました。

同バンクは調査報告に基づき、凍結保護剤を変更し、シーリング方法を改

め、さらにリスク管理体制を立て直すこととし、厚生労働省に報告を行ったところ、シーリング法を変更した昨年6月以降に調製保存されたさい帯血の公開・出庫が認められ、2月より実施となりました。兵庫さい帯血バンクでは今後も安全性の確保に努めたいとしています。

最後の「さい帯血バンクNOW」 編集作業を終えて広報部会員から

◇「さい帯血移植」と「さい帯血バンク」は極めて専門性の高い分野です。とはいえ、一般市民の理解と協力支援がなければ決して成立しない事業です。それを実践する役割が、広報部に与えられたミッションでした。広報はともすれば軽視されがちですが、予算もほとんどない中で何とか任務をこなしてくれたのも部会員のみなさんのご努力だったと感謝しています。（野村）

◇広報部会に加わったのは2011年夏からのことで、10周年記念誌の編集がきっかけでした。それまで知らなかった世界に触れることができ、門外漢ではありましたが広報誌作りのお手伝いをできたことで、少しは世の中のお役に立てたかなと良い思い出となりました。（井草）

◇私がさい帯血移植をした患者で、その経験を生かして何か手伝えることができないか、との思いで参加しましたが、

バンク運営に関して様々な事を知り、また貴重な経験をさせていただきました。患者にとって、今後もより良いバンクであって欲しいと願っています。

（佐藤）

◇参加して1年半ほど、あまりお役に立てておらず、申し訳なく思っています。広報部会の皆様お疲れ様でした。感謝と敬服です。みなで一字一句確認しながら、誤字脱字を確認していく姿勢は勉強になりました。業種の違う方々との話は非常に面白く、いわゆる「ざっくばらんな」お話しも多く楽しかったです。（長村）

◇様々な職種、色々な能力の広報部会員。共通点は頼まれた時、嫌な顔をせずに引き受けるところ。そして快く取材や投稿に応じて頂いた方々。事務局員の献身的な働き。それがあって創刊号からこの最終号まで滞るところなく発行できました。ありがとうございました。

す。（木村）

◇私の広報部会デビューは、第56号の病院訪問記でした。初めての取材で、読んでくれる方に、わかりやすく伝えるようにと思いながらだったのを覚えています。患者さんが多くの情報を得てもその情報を正確に理解し、取捨選択するのは大変な作業ですが、情報があったとのこと。これからも、患者さんへの情報発信やその情報の整理に関与できればと思っています。（成田）

◇10年間ほど広報部会に参加し、年次報告会の司会や10周年記念事業実行委員長を務めたことを思い出します。この間、過体重やHLA抗体がなければ、ほぼさい帯血が得られるようになりました。さい帯血の宿命ともいえる生着不全や感染症などの合併症の問題も解決されつつあります。さい帯血バンクの益々の発展を願います。（谷口）



「解散」を迎えて歴代会長から

一つの時代の終わり



初代会長

齋藤英彦

1999年8月に発足した「日本さい帯血バンクネットワーク」が約15年間にわたる活動を終える。「造血幹細胞移植に関する法律」の施行をうけて、より安定的で持続性のある体制をとり、移植を希望する患者さんが最適な移植を受けられるようにするためである。関係者として立法化により基盤が固まったという喜びとともに一抹の寂しさを感じる。ドナーの方々、役員、正会員、事業運営委員会など各種委員、各バンクの関係者、協力産科医院、日赤、ボランティアなどの努力により「公平、迅速、安全」に臍帯血を供給する社会システムとして大きな役割を果たした。私は発足から4年間の揺籃期の会長を務めた。発足当時は臍帯血移植数が約200例と少数で、関係者の情熱と努力によるゼロからの出発であった。ネットワーク体制の整備(技術指針、業務管理、さい帯血検索システムの構築など)の中核となったのは事業運営委員会(学会や財団の理事会にあたる)である。毎月1回の土曜、または日曜に開かれたが、各バンクの経営基盤や委員の考え方、立場、経験の違いから激論となり結論のでないこともしばしばあった。すると、鎌田薫初代委員長は一旦休憩を宣言され、熱を冷まして再開後に粘り強く調整力を発揮された。激論を交わすうちにお互いに信頼が深まり今となっては得難く、懐かしい思い出である。最後に、2001年9月に創刊された広報誌「さい帯血バンクNOW」と事務局を務めた日本赤十字社がネットワークの連帯感の助成と安定的運営に大きく貢献したことを付け加えたいと思う。今後の新しい体制に大きな期待を寄せたい。

その一方で、財政的基盤の確立、プライベートバンクへの対応、さい帯血提供児の白血病発症など困難な課題も多くありましたが、これらの問題にも幅広い皆さまの支援を得ながら相応の対応をし、移植医療の飛躍的な発展の一翼を担えたことは大変に幸せなことであったと、改めて感謝の念を強くしています。

造血幹細胞移植医療は、日進月歩の最先端医療であり、また、幅広い皆さまの支援なしには発展できないという特色を有していると思います。日本さい帯血バンクネットワークの活動を通じて積み重ねられたさまざまな経験が、新しい法制度の下で、造血幹細胞移植医療の更なる発展に大いに寄与していくものと確信しています。

関係各位のますますのご活躍を祈念しています。

などから保存最低基準の引き上げなどの改革が進められてきました。こうした実績をさらに加速させ、移植医療と公的さい帯血バンク活動を飛躍的に発展させる契機となることを目指して、同年10月に「創立5周年記念大会」を成功裏に開催させていただいたことが印象に残っています。

その一方で、財政的基盤の確立、プライベートバンクへの対応、さい帯血提供児の白血病発症など困難な課題も多くありましたが、これらの問題にも幅広い皆さまの支援を得ながら相応の対応をし、移植医療の飛躍的な発展の一翼を担えたことは大変に幸せなことであったと、改めて感謝の念を強くしています。

造血幹細胞移植医療は、日進月歩の最先端医療であり、また、幅広い皆さまの支援なしには発展できないという特色を有していると思います。日本さい帯血バンクネットワークの活動を通じて積み重ねられたさまざまな経験が、新しい法制度の下で、造血幹細胞移植医療の更なる発展に大いに寄与していくものと確信しています。

関係各位のますますのご活躍を祈念しています。

10周年と東日本大震災



第3代会長

中林正雄

日本さい帯血バンクネットワーク転換期である2008年4月～2012年3月まで

2期にわたり会長の役目を務めさせていただきました。この時期は、各さい帯血バンクのこれまでのたゆまぬ努力により2008年7月には公開さい帯血数が3万個を突破、同年12月にはさい帯血移植5,000例突破等、さい帯血移植、さい帯血バンク事業は飛躍的な発展を遂げました。

その中でも、2009年8月に「10周年記念事業」を秋篠宮殿下・妃殿下ご臨席のもと無事開催できたことが印象深く残っております。2011年3月に発生した東日本大震災では、仙台の宮城さい帯血バンクも少なからぬ被害を受け、災害に備えたさい帯血バンクの危機管理体制の整備、さい帯血の安全性強化の必要性を痛感しました。

当初11あったさい帯血バンクも経営危機等の理由から、解散、業務集約を余儀なくされ、根拠法のないさい帯血バンク事業に対して、法整備を求める活動を皆様と行ってきました。そして2014年1月「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」が無事施行されることとなりました。

その中でも、2009年8月に「10周年記念事業」を秋篠宮殿下・妃殿下ご臨席のもと無事開催できたことが印象深く残っております。2011年3月に発生した東日本大震災では、仙台の宮城さい帯血バンクも少なからぬ被害を受け、災害に備えたさい帯血バンクの危機管理体制の整備、さい帯血の安全性強化の必要性を痛感しました。

当初11あったさい帯血バンクも経営危機等の理由から、解散、業務集約を余儀なくされ、根拠法のないさい帯血バンク事業に対して、法整備を求める活動を皆様と行ってきました。そして2014年1月「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」が無事施行されることとなりました。

さい帯血の品質向上と安定的な供給のためには必要な過程ではありますが、これまでのボランティア活動としてのネットワークが解散することは寂しい限りです。しかし、15年にわたり日本さい帯血バンクネットワークの活動を通して培われた皆さまとの友情は、今後もいろいろな場面で続いていくことを期待しております。

法制化で国会陳情



第4代会長

加藤俊一

わが国初のさい帯血移植(同胞間)から20年、日本さい帯血バンクネットワーク

発足から15年近くの歳月が経ち、「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」の成立と施行に伴い、初期的な形態とされていたNW体制はその役目を終えることになりました。

初代齋藤英彦会長の時代はネットワークの立ち上げ【起】、二代目鎌田薫会長の時代は発展【承】、三代目中林正雄会長の時代は変化【転】、そして私の時代はNWの終焉【結】とでも位置づけられるでしょうか。

私が会長を受け継いだ頃の最大の課題は各バンクがかかえる膨大な赤字構造の解消であり、安全で有効なさい帯血を安定的に提供できる体制への変換を求める声が高まりを見せていました。中林前会長の下でまとめられた「将来構想検討会中間報告書」に基づき、造血幹細胞法の成立のために国会への陳情に何度も足を運ぶことになりました。民主党政権発足から2年半を経過した頃で「ねじれ国会」のため大事な法律が成立しにくい異常事態が続いていたため、平成24年8月29日に参議院、9月6日に衆議院でそれぞれ「全会一致」で可決された時には、喜びというより驚きの想いであり、同時に責任の重さに身の引き締まる思いでした。

役員会の皆様(加藤剛二、中島一格両副会長、陽田秀夫、横山莊司両監事)と事務局の絶大なご協力と齋藤英彦、中林正雄両顧問のご指導により、何とか激動の2年間の舵取りを行うことができたと思っております。

ネットワークを構成する各さい帯血バンクの皆様、さい帯血移植とさい帯血バンクの発展のために努力して頂いた行政と医療者の方々、そして終始温かい心と時には厳しい眼差しで応援して下さったボランティアの皆様にご心から感謝を申し上げて、15年の幕を閉じさせていただきたいと思っております。ありがとうございました。

飛躍とともに困難な課題も



第2代会長

鎌田薫

2004年4月に、会長の重責を担わせていただくこととなりました。この時期ま

で、齋藤英彦初代会長を初めとする前執行部のご尽力によってネットワークの運営と公的支援体制の基盤が確立されるとともに、各バンク関係者のたゆまぬ努力によってさい帯血保存公開数・移植実績数ともに大幅に増加し、成人への移植が定着したこ



移植病院 訪問

②8 聖マリア病院

地方都市の巨大病院



福岡県久留米市にある聖マリア病院は総病床数が1295床もあって、病床数では全国でも第3位という地方都市にありながら巨大な総合病院です。その名の通りカトリック系の医療機関ですが、教会や修道会などの宗教団体の運営ではなく、1人のカトリック教徒の医師が戦後に開業した小さな医院が母体でした。基本理念は「カトリックの愛の精神」のもとでの医療の実践です。ここではさい帯血移植も行われています。

地域密着の拠点病院

聖マリア病院では特徴的な取り組みがいくつも行われていますが、開設当初から未熟児診療には力を入れ、県内外から重篤な未熟児のほとんどがここにやって来ます。24時間365日という受け入れ体制を敷く救急医療では、年間に1万台の救急車が緊急患者を搬送して来ます。国際協力への積極的な関与や先進的医療への取り組みも進める中で、地域に密着した医療を展開しています。

移植の歴史は早くから

聖マリア病院の血液内科で最初の骨髄移植が行われたのは1988年ですから、わが国でも早期から造血幹細胞移植を手がけてきました。もちろん当初は血縁者間の移植でしたが、今では血縁は1割程度になっているそうです。昨年から新病棟の17階に移転し、移植ができる無菌室14床を含む34床の病棟で、医師3名を中心にした体制により血液

疾患患者の治療に当たっています。最近では年間10例ほどの移植を行っていますが、その約半分がさい帯血移植です。

治療の選択肢は患者さんに

最近の傾向は高齢者の移植が多く、そのため前処置は骨髄非破壊的なミニ移植が多くなり55歳以上の移植症例の8割ほどがミニ移植になっているとのことでした。今村豊血液内科部長によれば「移植治療は残念ながら早期死亡の可能性もあって万能ではありません。ここでは予後が不良の患者さんにも、できるだけ真実を患者さんとご家族に伝えて、治療方針を選択してもらって

いますし、緩和ケアの概念を積極的に取り入れて、希望に沿う全人的医療を目標にしています」とのことでした。

移植そして採取も

ところで、聖マリア病院は九州さい帯血バンクの「採取施設」でもあります。つまり、この病院の産科で出産した赤ちゃんのへその緒とお母さんの胎盤から採取されたさい帯血が九州さい帯血バンクに送られ、調製して保存が行われているのです。聖マリア病院はさい帯血を使う移植病院であると同時に、そのさい帯血を提供する基となる採取病院であり、さい帯血バンクとは深いつながりがある病院です。



院内の雪の聖母聖堂では毎週ミサがあって洗礼式や結婚式も

虎の門病院にタイムカプセル

世界で初めてさい帯血移植1万例突破を記念して、これまでのわが国のさい帯血バンクのあゆみを記録として残すためにタイムカプセルを作り、昨年9月の記念大会で披露されました。タイムカプセルはこれまでに最も数多くさい帯血移植を実施してきた虎の門病院（東京）に設置されることになっていましたが、正面玄関の入り口にアクリルケースに納められて展示されています。虎の門病院を訪れた際は一度ご覧ください。

